

(3) 自閉症の可能性のある幼児のジョイント・アテンション行動の促進に関する事例研究

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻修士課程 ○平木真由美

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 寺尾 孝士

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 諏訪 利明

【要 旨】

【背景】

2005年、発達障害者支援法施行以来、発達障害という概念が社会的に認知されつつあり、早期発見、早期診断の機運が高まっている。乳幼児期は、その後の発達や学習にとって重要な基盤作りの時期であり、地域の保育所等や乳幼児健診で発見された後、診断を受けるまでの期間も含め、できるだけ早い療育が重要となる。発達障害児、特に自閉症幼児の特性理解に基づく療育では、ジョイント・アテンション行動の発達の促進が、その後の本人の発達に大切であるといわれる。

【目的】

1歳半健康診査等で早期発見された自閉症の可能性のある幼児への個別の早期療育を一定期間実施し、ジョイント・アテンション行動を促進させることを目的とする。

【対象及び方法】

1歳半健康診査でスクリーニングされ、地域の児

童発達障害支援事業所に通所している自閉症の可能性のある幼児2名を対象に、13回のセッションを行いVTRに録画した。セッションは、子どもの選んだ遊びを中心に進め、セッション後、VTRより実施者の働きかけによる反応率を見た。保護者との面談を4回実施し、情報交換及びセッションへのフィードバックに活用した。また、セッション前後のCARS得点の変化を見た。

【結果及び考察】

セッションの結果、両児とも、複数の遊びにおいてジョイント・アテンション行動の反応率の増加が見られた。このことから、このセッションにおける方法により、自閉症の可能性のある幼児のジョイント・アテンション行動が促進されることが示唆された。保護者との面談では、相手の目を見ることへの関心が高まり、子どもの成長を感じていることが伺えた。また、両児とも、人との関係においてCARS得点の減少が見られた。